

f c t

GAZETTE

ガゼットは
テレビと市民
のデータベースです

1995. 11

vol. 15

Number. 57

複写(コピー)は
ご遠慮下さい。

編集・発行/FCT市民のテレビの会(Forum for Citizens' Television)編集委員会 責任者・鈴木みどり
発行所・神奈川県葉山町長柄1601-27 購読料/年間(3回発行)¥2000(送料共)一部¥650(送料別)
第一勧業銀行返子支店(普通預金1425785) 郵便振替 00190-3-84097

■特集1 FCT調査報告

戦後50年の テレビを検証する



毎年8月はテレビが珍しく良心的な番組を送り出す季節……「日本人が一年に一度正気になる時」と言ったのは故大岡昇平だった。

戦後50年の節目を迎えた今年1995年夏、いわゆる「8月ジャーナリズム」は意欲的な企画を様々に展開してみせてくれた。6、7月頃から断続的に特別企画が放送され、8月には東京で視聴できるキー7局とBS2局で1カ月に120本を超える番組が放送された。他に映画やニュース、ワイドショーなどの枠で特集として組まれたものを加えると数としては相当な量である。ではどんな内容で、いつ、どのように放送されたか。

5年前「ガゼット」39号で「45年目の夏、テレビは何を伝えたか」を特集し、検証した私たちは、同じ手法で5年後の調査を行った。5年前の8月1カ月では48本(BS放送、再放送、映画を除く)だった。詳しくは同号を参照して頂きたい。今回放送された番組については次頁より資料として一覧表にし、さらに内容をテーマ別にわけて、放送時間の状況とともに紹介した。また8月1-15日の各局の番組について、FCTスタッフがメモをとりつつVTRに録画し、報告をかねての“番組審議会”をおこない、視聴者・市民として戦後50年企画番組をどう見たかをまとめた。

■CONTENTS■

- 特集1 FCT調査報告
戦後50年のテレビを検証する……………1
- 特集2 FCTフォーラム記録
テレビと子どもの権利……………10
- 特集3 NGOのすばらしいパワー
北京世界女性会議に参加して……………12

- 特集4 ニュースのなかの女性参加
グローバル・メディア・モニタリング
プロジェクト 最終報告から……………15
- 会員コラム……………17
- データベース……………18

イラスト 市川雅美

戦後50年関連番組一覧

(1995, 8, 1~31)

*野球放送延長の影響で時間が変更された番組がある。

*深夜放送(0:00~5:00)の日付は1日前。

*再放送は7月以前に最初の放送があったもの。

《特番・ドラマ等》

NHK (総合)

NHKスペシャル

- 戦後50年そのとき日本は・新日鉄誕生、攻防、巨大企業と公取委 (5日19:30~20:30)
- 調査報告地球核汚染・ヒロシマからの警告 (6日21:00~22:30)
- 長崎・映像の証言・よみがえる115枚のネガ (9日21:30~22:20)
- 引き裂かれた歳月・中国残留婦人の50年 (10日21:30~22:20)
- 時は流れず・794 通が語る太平洋戦争 (13日21:00~22:30)
- 死者たちの声・大岡昇平・レイテ戦記 (14日21:30~23:00)
- 戦後50年世界からのメッセージ／ゴルバチョフサッチャー、マンデラ、ワイツゼッカー、ワレサシヨミット、リー・クワンマー、明石康、ハベルマクナマラ、ファン・パン・ドン、ノ・テウ、 (15日20:00~21:15)

NHKスペシャル④「映像の世紀」

- 20世紀の幕開け・カメラは歴史の断片をとらえ始めた (1日23:30~0:45)
- 大量殺戮の完成・塹壕の兵士たちはすさまじい兵器の出現を見た (2日23:30~0:45)
- それはマンハッタンから始まった・噴き出した大衆社会の欲望が時代を動かした (3日23:30~0:45)
- ヒトラーの野望・人々は民族の復興を掲げたナチスドイツに未来を託した (4日0:05:1:20)
- 世界は地獄を見た・無差別爆撃、ホロコーストそして原爆 (5日0:00:1:15)
- 若者たちの旅初めて戦争を知った (8:35~9:20)

- 毒ガス兵器がつけられた島大久野島の証言(3日)
- 私は731部隊員だった人体実験50年目の告白 (4日)

クローズアップ現代 (21:30~22:00)

- 被爆者こころの記録1万3000人の調査から(3日)
 - 韓国忘れられた被爆者たち・原爆ドーム(4日)
- #### 人間マップ (23:30~0:00)

- 肖像写真で見つめる歳月・江成常夫 (21日)
- 空襲体験を絵に託して・金野紀世子 (22日)
- 一万三千の赤ちゃん迎えて・栗原トシ子 (23日)
- 私の戦後50年・早坂暁 (24日)

土曜ドラマ

- されど、わが愛・広島から韓国へ、被爆二世の医師と父・その長い旅路 (5日21:00~22:30)
- ドキュメント日本列島 (13日18:10~18:45)
- わらべうたに祈りを・沖縄・心を結ぶ調べ

特別番組

- 平成7年・平和記念式典(6日8:00~8:35)
- 八月十五日・花の記憶「朗読ショー・花に託したあの日の思い」(11日21:40~22:25)
- 思い出のメロディー／戦後50年、作曲家・吉田正が語る(12日19:30~21:30)
- 全国戦没者追悼式(15日11:45~0:05)

NHK (教育)

E T V特集 (20:00~20:45)

- 映画“ショーア”ユダヤ人絶滅の証言②クロード・ランズマン監督に聞く (1日)
 - 50年目の“従軍慰安婦”問題①“わかちあいの家”のハルモニ達 (2日)
 - 50年目の“従軍慰安婦”問題②日本はいかに償うべきか (3日)
 - ワイツゼッカー 戦後50年へのメッセージ①(17日)
 - ワイツゼッカー 戦後50年へのメッセージ②(18日)
 - ロバート・キャパ 5つの戦場を撮った男④(23日)
 - 大空を夢見た日・ある少年飛行兵の日記 (28日)
 - 教師たちの沖縄戦 (29日)
- #### あすの福祉 (3日19:20~19:50)
- あの時ボクらは・戦時下生きてきた障害者たち

海外ドキュメンタリー (5日20:00~20:45)

- オッペンハイマーと原爆われは死なり

日曜美術館

- 原爆の凶・丸木美術館 (6日9:00~10:00)

石油の世紀 (10日20:00~20:45)

- 第二次世界対戦と石油確保・豊富な原油量

視点・論点

- “大和”の最期 (15日22:30~22:40)

人間大学

- 円の戦後史 (29日22:40~23:10)

日本テレビ知ってるつもり!? (21:00~21:54)

- 「沼田鈴子」21歳被爆広島原爆語り部 (6日)

- 「加藤哲太郎」真説私は貝になりたい! (20日)

ドキュメント '95 (0:15~0:45)

- 長崎原爆松谷訴訟 (20日)

- 毒ガス兵器 (27日)

終戦50年特別企画

- 涙の緊急報告!! 「戦場の中の子供たち」

(1日19:00~20:54)

- 幻のフィルム発見! 氷川丸物語

(1日23:50~1:15)

- 細菌戦部隊731は生きている

(2日23:50~1:15)

- カメラマンは見た! 衝撃映像秘話

(3日0:20~1:45)

- 女たちのヒロシマ・50年目の夏、私たちの声が聞こえますか!?

(5日13:30~14:55)

- 広島平和記念式典 (6日8:00~8:30)

- 100台のカメラが見た終戦(13日14:00~15:25)

- バチカン世界平和祈願コンサート

(14日23:50~1:15)

TBSテレビ関口宏のサンデーモーニング

- 広島被爆50年式典中継 (6日8:00~10:00)

月曜ドラマスペシャル (21:00~22:54)

- 向田邦子終戦特別企画・いつか見た青い空・哀しき家族の最後の晩餐 (7日)

- 終戦50年特別企画・こちら捕虜放送局アメリカの皆さん聞こえますか、僕は囚人 アナウンサー(14日)

傑作ドラマシリーズ㊦

- 私は貝になりたい (12日12:00~14:25)

報道特集

- JNN総力! 「私は夢中で引き金をひいた!」 (13日17:00~18:54)

- 照準が合った! 爆弾投下! 50年前のあの悪魔のせん光は人体実験だった? (20日18:00~18:54)

- 50年ぶりの同窓会!! 悲劇の広島に出会ったアジア留学生 (27日18:00~18:54)

ドキュメンタリー特集 '95

- 妻たちの特攻 (14日1:10~2:10)

終戦特別企画

- 「関口宏が迫る広島・長崎50年目の真実」埋もれたフィルムがいま語る (6日14:00~16:00)

フジテレビNONFIX

- 「アジア映画から見える戦後50年」 (9日1:20~2:30)

- 東京春浪漫「東京の大学に入学した4人の若者たち」 ㊦ (16日1:20~2:15)

- 戦争に負けて私は生まれた混血少女の戦後50年 (23日1:20~2:15)

木曜ファミリーランド

- 「戦後50年特別企画・さんまと一緒に見ようまると芸能50年史」 (10日19:30~20:54)

被爆50年報道特別番組 (7日2:30~3:25)

- 「揺らぐ太陽」今問う原爆の是非

金曜エンタテイメント

- 戦後50年特別企画・女たちの戦争、進駐軍にさげられた女たちの悲劇 (18日21:03~23:22)

テレビ朝日徹子の部屋 (13:15~13:55)

- 「沼田鈴子」71歳の原爆の語り部 (4日)

- 「ミッキー安川」大空襲 (11日)

- 「京唄子」戦中初舞台 (14日)

- 「小島清文」元大和乗組員の証言 (15日)

水曜特バン!

- 戦後50年特別企画・不滅の歌謡ヒットパレード名曲の感動をあなたに (2日19:00~20:54)

ザ・スクープ

●戦後50年特別企画「広島・長崎原爆投下の真相」
決定版 (5日18:00~19:30)

土曜ワイド劇場

●戦後50年特別企画・時よ、とまれ父親殺しを追
う執念の巡査! (5日21:02~22:51)

朝まで生テレビ

●100回記念・戦後50年特別企画「日本人と天皇
制とオウム」 (5日0:00~06:00)

テレメンタリー '95

●原爆後遺症 (6日7:00~7:30)

●驚きもの木20世紀 (11日20:00~21:48)

●戦後50年特別企画「愛と野望の地平線! 李香蘭
と川島芳子・満州国悲劇の女たち」

日曜洋画劇場 (ドラマ)

●戦後50年特別企画「愛と死の決断! ハンガリア
舞曲をもう一度」 (6日21:02~23:24)

●ザ・スーパーサンデー (13日19:00~20:54)

●戦後50年特別企画・ゴジラの見た日本」発見!
戦後50年特別企画・松本清張事件にせまる㊦

●①相沢事件・軍務局長斬殺さる②2・26事件
(5日15:00~16:55)

●③戒厳令下ル2・26事件 (7日23:55~0:50)

●④東條英機暗殺 (8日23:55~0:50)

●⑤昭和20年8月15日・終戦日の荷風と潤一郎
(9日23:55~0:50)

●⑥証言・60年安保と浅沼刺殺事件
(10日23:55~0:50)

●⑦銅メダルの男円谷の死 (12日16:00~16:55)

●⑧3億円事件の犯人は⑨連合赤軍の崩壊
(13日15:30~16:55)

戦後50年特別企画

●南洋桜は知っているサイパンの戦争と平和
(4日2:25~3:20)

●核時代の正義とは… (5日13:00~14:55)

●広島平和式典中継 (6日8:00~8:30)

●ヒロシマ・原爆はなぜ投下されたか—50年目の
検証 (6日14:00~15:55)

●裸足のゲンヒロシマからアメリカへ (6日16:00~17:25)

●長崎平和祈念式典 (9日11:00~11:30)

●スポーツ英雄伝説 (13日14:00~15:25)

●「あの人に会いたい…!! あの人を探して…!
出会い別れ…涙の再会」 (6日18:00~20:54)

テレビ東京

●ドキュメンタリー人間劇場 (22:00~22:54)

●「あゝころ空は青かった」本田靖春 (2日)

●「加藤シヅエ白寿の演説」 (9日)

ファミリー東京

●大学生の“戦争取材記” (10日9:00~9:30)

日曜ビッグスペシャル

●戦後50年! 日本の危機を語る! 政治は何をして
きたか? (13日18:00~20:54)

東京レポート

●東京の戦後 (18日09:00~09:15)

●ナビゲーター '95 (18日22:00~22:30)

●「タイムカプセルの街」焼き鳥横丁50年

●戦後50年特別企画 (13日14:00~15:56)

●「日本の半世紀・我々は何を失ったのか」

NHK (衛星1)

●戦後経済を築いた男たち (21:00~21:50)

●「桜田武」 (6日)

●「石橋正二郎」 (7日)

●「出光佐三」 (8日)

●「木川田一隆」 (9日)

●ショア—証言ユダヤ人大虐殺 (21:50~0:20)

●ナチの絶滅作戦・衝撃の証言 (13日)

●“絶滅収容所”その実態の記憶 (14日)

●終わりなきユダヤ人迫害の歴史 (15日)

●沈黙・告白、ガス室からの生還 (16日)

ニッポン50年㊦

●海外渡航自由化 (13日18:30~19:00)

列島スペシャル

●原爆稲穂長崎50年目の稔 (26日13:00~14:30)

特別番組

●全国戦没者追悼式 (15日11:50~12:05)

●日米市民討論・アメリカが見たナガサキ
(9日22:30~0:00)

●日米2つの文化を生きる・日米混血児が歩んだ
戦後50年 (20日22:00~23:30)

NHK (衛星2)**世界わが心の旅**

● 鷹赤児マリアナ諸島・楽園の亡霊たち／ピキニ環礁に眠る戦艦“長門” (5日22:00~22:45)

素晴らしき地球の旅 (13日19:20~22:50)

● 黒潮二千キロ唄と祈りと嘉納昌吉の沖縄広島

BS週刊ブックレビュー (8:00~9:00)

● 8月15日の本 (13日)

● 昭和を伝える写真集 (20日)

● '95夏カルチャースペシャル(14日20:00~21:20)

● 野坂昭如・戦争童話集・忘れてはイケナイ物語

BSドキュメンタリー (26日22:45~23:45)

● はだしのゲン誕生物語はだしのゲン舞台化へ

特別番組

● 「響け平和のハーモニー」ピース・ワールドイン・広島 '95 (6日10:30~11:45)

● 「アンネ・フランクの思い出」“アンネの日記”著者15年の短い生涯を描く (18日20:00~22:00)

● 広島ピースコンサート'95(25日21:00~23:00)

《映 画》

以下()の数字は放送日

フジテレビ ビルマの豎琴 (12日)

テレビ朝日 ミッドウェイ (12日)

NHK (衛星2) 日本のいちばん長い日(15日)

テレビ東京 ぞう列車がやってきた(1)うしろの正面だあれ(2)花物語(3)キクとイサム(4)あゝひめゆりの塔(7)雲ながるる果てに(8)ガラスのうさぎ(9)執炎(10)北緯15°のデュオ(11)

《ニュース、ワイドショー・特集タイトル》**NHK (総合)**

● おはよう日本 [月-土]

モノが語る戦争・父あての血書(1)戦争孤児の写真(2)慰問の押し花(3)恩賜のお菓子(4)仏核実験再開表明に被爆者抗議(2)平和の祈りコンピューターで発信(3)被爆50年海外メディアの目(5)戦後50年“南京からの手紙”/シリーズ特攻後続隊の許可証(7)シリーズ・昭和20年を描いた絵(8)応援旗をふる広島(9)中継手塚治虫の描いた戦争(14)終戦の日中継リレー東京ソウル(15)アニメ・アン

ネの日記公開(19)

● **生活ほっとモーニング** [月-金]

祖父の戦争を追って (24)

● **週刊こどもニュース** [日]

原爆から50年(6)学童疎開児の手紙(13)

● **イブニングネットワーク** [月-金]

原爆50年の悲しみ(4)現代っ子と戦争体験(7)長崎原爆から50年(9)シリーズ戦後50年(14)終戦の日列島の表情(15)百里基地反対運動(16)都内の戦争跡を記録(17)戦後50年1手紙(18)

● **ニュース7** [月-日]

“原爆投下”意見広告広島の苦悩(3)君は広島で何を見たか・世界高校生サミット(4)爆心地長崎・平和への祈り(9)“戦後50年”全国各地平和への誓い(15)

● **ニュース9** [月-金]

長崎原爆の日(9)アジアの戦後50年(14・16)終戦の日(15)比戦後50年(17)豪戦後50年(18)

● **ニュース11** [月-金]

原田医師のヒロシマ50年(4)私の戦後50年・落合恵子(7)/小栗康平(9)樋口久子(10)/佐高信(11)戦争に埋もれた炭鉱事故(14)終戦の日・各地に見る8・15(15)戦後50年の大ヒット・夢(21)流行語(22)食(23)商品(24)

日本テレビ

● **ズーム!!!イン!朝** [月-金]

長崎防空ごう物語(9)原爆乙女支えた牧師(7)それぞれの戦後50年(15)

● **ニュースプラス1** [月-土]

ジャングルからの生還あゝ感動52年目の帰国(15)

● **日曜夕刊** [日]

広島原爆忌(6)

● **きょうの出来事** [月-土]

エリは慰安婦になった(9・10)若者が伝えるカミカゼ(13)青年はなぜ捕虜の首を(15)

TBSテレビ

● **フレッシュ!** [月-金]

両陛下沖縄慰霊の旅(3)

● **モーニングEYE** [月-金]

浅丘ルリ子が語るタイ収容所秘話(11)総力取材

“特攻”その生と死・母の祈りと奇跡の生還(15)
ニッポン徹底大討論・女が変わったこの50年(18)

●ニュース1130 [月-日]

福竜丸被爆者証言(15)

●ニュースの森 [月-日]

長崎の原爆の日・貴重映像(9)反対を押し切って
太平洋を渡った“戦争花嫁”の50年(10)米国をあ
ざむく謎の謀略放送“日の丸アワー”極秘テープ
を入手(14)終戦後50年・平和への祈り／私は毒ガ
スを埋めた…元日本兵の痛恨の旅路(15)戦後の娯
楽の王様・パチンコ人気支えた50年秘話(21)

●筑紫哲也ニュース23 [月-金]

日本人のいる場所未帰還兵の今(1・2・3・4)原爆投
下スターリンは知っていた(8)被爆50年23イン
長崎スペシャル(9)海を越え戦争花嫁それぞれの5
0年(10)戦後史上を向いて歩こう(11)生出演だけ
しの戦後50年史(14)

フジテレビ

●どうーなってるの?! [月-金]

戦後50年・祖父母の青春!(11)

●スピーク [月-土]

亡き友へ魂の白い花(11)多元中継終戦50年(15)

●スーパータイム [月-土]

終戦50年企画・はだしのゲンが続ける戦い(15)

●ニュースJAPAN [月-金]

戦地脱出で見た平和国日本(1)

海ゆかば…50年目涙の再会(16)

テレビ朝日

●新やじうまワイド [月-金]

ヒロシマと戦後50年(7)ナガサキ(9)戦後50年とは
何なのかまた大臣の無神経発言(11)戦後50周年と
村山政権何が終わり何が始まる(15)NY発“戦勝”
記念日世界は何を学んだのか(16)

●お昼のニュース天気ワイド [月-金]

50年目に自分と再会(2)平和願い最期の演奏(7)マ
ンガ家の敗戦体験(8)港に眠る戦争の遺品(13)50
年ぶり届いた手紙(15)

●ステーションEYE [月-日]

ヒロシマあれから50年(6)密着!喜納昌吉平和の
訴え方…手こぎ船で黒潮に乗って(7)パチンコそ
の歴史をひも解けば、戦後50年が見えます

(9)終戦3日後の激戦の地・占守島50年目の来訪
(18)

●ニュースステーション [月-金]

50年目の夏…老教官の鎮魂の旅(3)終戦特集…検証
・第2総軍指令部…原爆投下直前に広島で準備
された本土決戦計画とは!? (4)幻の特攻兵器“伏
竜”…爆弾と竹ザオの青春・広島中継(7)戦後50
年いまだ発給されない被爆者手帳(8)検証シベリ
ア抑留はなぜ起きたか?そして“密約”はあった
のか瀬島竜三氏の新証言で迫る戦後史最大の謎(9)
検証・ソ連参戦とシベリア抑留…瀬島竜三氏の新
証言(10)戦中の日本にもあった・原子爆弾製造計
画/50年目のソウルの若者…生中継(11)米軍カメ
ラマンの見た50年前のナガサキ(14)我々がやり残
してきたことそして未来へ…光復50年目のソウル/
エノラゲイが語りかけるもの…米に何を訴えるか/
日韓・日米世論調査…新たな連帯を求めて/我々
は次の世代に何を語るのか?(15)戦後の歴史を変
えた台風(25)

テレビ東京

●もぎたて朝一番 [月-金]

独の戦争責任ユダヤ人への償い(9)旧海軍要さい
探検/ブラジル戦(10)

●ニュースワイド11 [月-金]

戦後50年・ドイツのユダヤ人への償い(9)ある従
軍慰安婦・50年目のつぶやき(10)戦後50年お天気
秘話/8・15不戦の決意(15)

●レディス4 [月-金]

被爆者の心よとどけ!“米国”に(4)学童疎開
少女たちの“戦争絵日記”(15)“母の記録”戦下
を逃れて80歳(18)

●THISイブニング [月-日]

50年目の零戦(3)原爆と子供達(6)房総空襲秘話
(20)

●ワールドビジネスサテライト [月-金]

列島改造論(14)戦後食文化を変えた男(28)

NHK (衛星1)

●BSニュースワイド [月-金]

50年目の証言・フランス戦後秘話(10)
戦後50年インタビュー・ドナルド・キーン(21)
戦後50年インタビュー・ヤン・ソギル(22)

「戦後50年テレビ番組」テーマ別分類 8/1～8/31 (単位：本数)

テーマ	局	NHK 総合	NHK 教育	日テレ	TBS	フジ	テレ朝	テレ東	衛星 第1	衛星 第2	合計
戦争と子ども	戦時下の子ども			1						1	4
	混血児						1			1	
戦争と女性	従軍慰安婦		2								6
	「中国残留婦人」	1									
	その他				2	1	1				
戦争と若者	学徒出陣、少年兵		1				1				5
	その他					1		1			
個人の戦争体験	著名人	4	1	1			4	2			19
	市民、視聴者	2	1		1		2				
	兵士の証言				1						
広島・長崎の被爆及び世界の核問題		5	2	3	3	1	6	0	2	1	22
東南アジアの人々と戦争		1		2			1			1	6
式典中継		2広・戦		2広・バ	1広		2広・長		1戦	2広・バ	10
戦争の検証	天皇制						1				1
	沖縄	1	1							1	3
	731部隊	1		1							2
	毒ガス兵器	1		1							2
	昭和の歴史						3			1	4
	終戦									2	2
	ユダヤ人虐殺・ナチス	2	1						4		7
	その他	3	2	1	1						7
世界の政治家の話		1	2								3
戦後日本の政治、経済、社会		1	1				4	4	5		15
スポーツ、芸能		1				1	2				4
合計		26	14	12	9	6	27	7	13	9	123

リストアップした123本の戦後50年番組についてどのようなテーマの番組であったかを知るために上の表を作成した。

●テーマ別にみて一番多かったのは広島・長崎の被爆及び世界の核問題で22本である。

●戦争と女性については、中国で世界女性会議が開催中であったにもかかわらず6本と少なく、従軍慰安婦及び「中国残留婦人」（終戦時、中国人と結婚し現地に残留せざるを得なかった女性）の問題については民放局の放映は1本もない。

●個人の戦争体験については著名人と市民とに分けてあるが、著名人とは早坂暁、加藤哲太郎、京唄子、加藤シズエ、本田靖春などである。市民・視聴者の戦争体験の中には手紙による投稿（NHK総合）やテレビ公開尋ね人（テレビ朝日）など

の視聴者参加型番組も3本ある。

●式典中継の内容は広島・長崎の平和記念式典、全国戦没者追悼式、バチカン世界平和祈願コンサートなどである。

●日本の加害者責任を問う番組については731部隊2本、毒ガス兵器2本など本数は少ない。

●局別にみると、本数の多いのはテレビ朝日27本、NHK総合26本である。逆に本数の少ないのはフジテレビ6本、テレビ東京7本で局による差は大きい。

●表にはないが、放映時間帯についてふれると、午前0時以降の深夜に報道番組やドキュメンタリー番組が計23本ある。特に日本テレビでは12本中6本、フジテレビでは6本中4本が深夜の時間帯である。（まとめ・佐々木はるひ、新開清子）

私たちの番組審議会（FCTスタッフ） 戦後50年番組を“読む”

司会 8月1日から15日までの番組を各局手分けして録画、ウォッチングしたので、その状況を報告するところから……

A NHKはわりに見やすい時間帯に多くの特集がありました。「引き裂かれた歳月」は、戦争中に中国大陸に渡り、敗戦となった。一族が帰国する資金のために、中国人と結婚させられた女性たちの追跡調査をしている。しっかり描いてあるのですが、こういう国策的な生き方を強いられた人々に対して国の責任を追及するといった姿勢がまったく欠けていました。

視聴者からの手紙を募った「794通が語る太平洋戦争」という番組は手紙の主にインタビューしてまとめてあるのですが、一般の市民にとっての戦争という企画のはずが、思い出として出てくる写真が出征時の軍服姿ばかりで戦争を美化しているような映像になっていました。

C 手紙の主はほとんど女性で「立派な靖国の妻」という取り上げ方も気になりました。赤とんぼを映しながら手紙を読み上げてその書き手を訪ねるという作り方も安易です。

E 感傷的で戦争を美化している。

A 「わらべうたに祈りを」は、沖縄のわらべうたを楽譜にしている女性が、戦後50年では区切れない、と語り、これからに向けた生き方の視点もきちんと入っている、印象に残る番組でした。

E 沖縄でこの夏米軍による少女のレイプ事件が起きて、戦争がほんとに区切れない、続いていることだという実感もあったし……

A 「花に託したあの日の思い」という朗読ショー、というのも、新機軸をねらったのかもしれないけれど、中途半端な印象でした。

B 教育テレビは話題になった「ショア」の監督にインタビューした「ユダヤ人の絶滅証言」、「50年目の従軍慰安婦」の問題、原爆の父といわれるオープンハイマーの人物ドキュメントなどこの局ならではの生真面目スタイルでした。

C 日本テレビはおおむね深夜の放送で、ゴールデンアワーはお手軽番組。せっかくの良心的番組は夜中の12時すぎって、視聴率しか眼中にないからですね。せめて今年位は逆転させるくらいの姿勢がほしかった。

日本テレビは731部隊の問題の検証をはじめとして、アジアで日本人が何をしたかというテーマがほとんどでした。「パチカンコンサート」はシスティナ礼拝堂の修復に協力しているこの局が、イタリアのテレビ局と共同で制作したもの。でも磯村さんが例の調子で司会するからまるでNHKの番組になってしまっておかしい。

D TBSは関口宏ばかりが司会をしていて出過ぎという感じでしたが。「私は夢中で引き金を引いた」は朝鮮、湾岸戦争で引き金を引いた兵士にインタビューして、兵士の側の癒されることのない心の傷、毒ガスを使った兵士の身体に残る深刻な後遺症などをとりあげていました。国家にとっての戦争、地域にとっての戦争、個人にとっての戦争のうち、個人の部分を掘り下げようとして、証言を多くとってあってよかった。

B フジテレビも6番組のうち4番組が深夜の放映でした。「存在すること」には意味があるけど。
(笑い)

「揺らぐ太陽」でスミソニアン原爆展が中止になった経緯を多くの関係者に取材してまとめてあった。よい番組だったのに、夜中の2時半という時間にやるとは……

A いいもの作れるのだから、真面目に放送してくれたらフジテレビを見直したのに……。

C 18日の「女たちの戦争」は、日本の進駐軍対策として慰安婦を集めた、というドラマだったけれど、興味本位的でいやな感じだった。

E テレビ朝日「はだしのゲン・ヒロシマからアメリカへ」はゲンの作者がアメリカに行って、反核の兵士の人たちと交流していくんです。アメリカにも反核運動があることを知りました。核実験で被爆して後遺症に悩んでいる人もいます。日本が唯一の被爆国ではないこともわかりました。

C 「徹子の部屋」に出た「大和」の生き残りと

いう人の証言は迫力があつた。731にしてもそうですが、証言をする人たちがみんな80歳近い年になっているわけで、今年多くの証言をもらっておく絶好の機会であつた、と思ひました。

F (書面参加) テレビ東京は、加藤シズエなど人間を通して戦後50年をドキュメンタリーにするという手法で、よく描けていた。

映画が多いのもこの局の毎年の特徴で、よく選んであるけれど「作らないで済ませちゃっている」という印象はあります。

抜けていたメディアの検証

司会 BSはずいぶん意欲的だったみたいですが。

E はたしてどの位見られたものでしょう。

D 「ショアー・証言ユダヤ人の虐殺」は例えばBGMがまったく入らない、自然の音だけで、証言者を長いカットでじっくりと映している、あれこそクローズアップというのだと思つた。沈黙もそのまま、しっかりと撮るし、あれくらい腹をすえて作るのはすごい、と。

C すべて現在形で語るし、死者に変わって語ることが生き残つた人々の唯一の役割なのだ、と徹底している、監督の迫力がすごい。フランス人の反ナチレジスタンスに参加していた人だそうです。

B 日本のドキュメンタリーはみんなBGM入りで、ナレーションはことさらにレトロっぽくしてある、これ50年番組の特徴でもありますよね。

A 戦争っていうとユダヤと日本のことしか出てこない感じがして、もっといろんな戦争があつただろうし、例えば韓国では今度の戦争についてどんなドキュメンタリーを作っているか、といった紹介の番組があつてもよいのに。

司会 あと何か足りないと感じたことは？

C 戦後50年の間に日本人は何を考え、何をしたかという検証がなかつたのではないのでしょうか。

A BSに「戦後経済を築いた男たち」というシリーズが4夜あつて、経済の分野ではあつた。

C 精神史的なものはテレビではむずかしい。

B 私はメディアの検証がなかつたと思つた。

A カメラマンの話はあつて、映像の残っている

ものは出来るんですね。

E 国策映画を作っていた映画社についてはかなりの時間を使って紹介していました。

A メディアがはたした役割についての検証がない。戦後50年企画はテレビが最も熱心で、新聞や雑誌はもうひとつ熱意が足りなかつたという印象でした。

B あの政府の「不戦決議」言葉だけ並べた腹立たしいのを、たいした批判もしないでやり過ぎたマスコミ、を黙認してしまう私たちの責任も問われるかもしれません。

C 私は15日の戦没者追悼式で土井さんが何とメッセージするかぜひ聞きたいと思つて12時のニュースをつけたけれど、どの局も15秒位でカットされてしまい、怒つた。

A たしかBSで中継をずっとやっていました。

E 何かつていうとBSにまかせるの、よくない。

B NHKの逃げの手に使うわけ

D 6日、9日、15日のニュース位は時間を延長してもきちんと式典その他の関連ニュースを充実してやるべきじゃないでしょうか。何しろほとんどの番組は深夜なのだから。

E 中継ではないけれど、ニュース時間帯のなかで特集として戦後50年の検証はかなり行われていた。なかなか見ごたえのあるものもありました。

C アジアに取材に出て、例えば日本兵でそのまま現地に残つて、医者になったり、かつおぶし屋さんになったりしている、年齢でいえば80近い人たちが、ちょっと離れた立場から日本をどう考えているか、といったインタビューは、かなりシビアなもので、説得力があつた。

A 日本の加害者、侵略者としての立場を見据えようという発想はここ2、3年、とくに昭和が終わつてから出てきていると思ひますが、なにしろ国として国家として反省していないから……

C ワイツゼッカーが日本にはいないから、ね。教育テレビが彼の講演をこま切れにして、余計なコメントを入れて台無しにしてやってくれました。

司会 来年の8月に何が出てくるか、各局の姿勢に期待しましょう。(まとめ・竹内希衣子)

テレビと子どもの権利

1995年3月、オーストラリア、メルボルンで開催された「テレビと子ども世界会議」は、日本では考えられないほどの規模のもので、世界には子どものためのテレビを重視している国が多いことを改めて知らされることになった。これからの日本の子どものテレビの問題をどう考えていくか、様々な問題のありかを探るために、今回のフォーラムは「テレビと子どもの権利」をテーマに企画した。日本における「子どものためのテレビ憲章」づくりを視野に入れての企画である。

フォーラムは、メルボルン会議に参加した鈴木みどりから同会議の意義や会議の主なテーマなどについて報告があり、続いて日本の最近の子ども番組のいくつかを編集したVTRを使用してワークショップに入った。（「テレビと子ども世界会議」の詳細はガゼット56号参照）最後に世界会議の開催国であったオーストラリアで、放送法の一環として位置付けられている「子どものテレビ基準」を参考にして、日本でこのような基準を作るとしたらどのようなことが必要か、またどのようなテレビ憲章を作っていったらよいかなどについて意見を交わした。

（於：東京都女性情報センター1995年7月23日）

- ①ワークショップで使用したVTR
メルボルン会議で日本の子ども番組を紹介するために使用したVTR。7本の子ども番組とCM2本を含め約6分程度に編集したもの。（表）
- ②ワークショップの手順
- ・VTRを見て各自分析シートに記入
 - ・今回の分析シートはVTRにある番組名を記入してあるもので、各番組ごとに登場人物に注目して映像と音声について気付いたことを記入していく。最後にCMについても気付いたことを記入する。
 - ・グループに分かれて話し合い
 - ・各グループでの話し合いの結果を発表

（表：VTRの内容）録画日1995年2月

グルグルパクン(NHK教育)月・水10:15~10:30 対象/養護学校の児童(学校教育)
天才テレビ君(NHK教育)月~木18:00~18:30 対象/幼児~小学生
おかあさんといっしょ(NHK総合)月~土9:30~10:00 (NHK教育)@月~土17:00~17:30 対象/幼児
週刊子どもニュース(NHK総合)日8:30~9:00 対象/小学生
ドラエモン(テレビ朝日)金19:00~19:30 対象/幼児~
セーラームーンS(テレビ朝日)土19:00~19:30 対象/幼児~・主に女兒(CMを含む)
ドラゴンボールZ(フジテレビ)水19:00~19:30 対象/幼児~・主に男児(CMを含む)

③各グループでの討議と発表

グループでの討議の内容を重複を避けて、各グループから発表してもらった。

報告 *グループ1

男女の役割固定で描かれている「ドラエモン」の母と子、父の存在は日常生活をそのまま映していると再確認した。NHKの番組はコンピューターグラフィックスが目まぐるしく展開されているが、テレビの中にまで持ち込む必要はあるのだろうか。もっと心の通った番組をと思うが、子どもはそういう番組を見ないのだろうか。

「セーラームーンS」は胸や脚を誇張しているが、子ども番組といえるのだろうか。「グルグルパクン」でハンディキャップの子どもたちが出演しているのはよいが、他の子どもたちとの交流はない。

どの番組も子どものしぐさが「ミニ大人」という感じで、ありのままの活気のある子どもの姿で

出ていない。

*グループ2

大人の見てほしい番組と子どもの見たい番組とではずれがあるのだろうか。アニメ番組の内容は女は助けられ、男は助けるといったストーリーが多いのは制作者が男だからか？

「セーラーMoonS」は変身シーンに力を入れている。アニメ番組として画像の質が低い。昼と夜の空の色が作られていない。但し変身シーンだけは特別扱いられている。

*グループ3

どの番組も展開が速く、色彩が派手ということが共通している。

「グルグルパッキン」のような番組ができたことはいいが、養護学校の子ども向けだけというのは疑問。放映時間も学校でしか見られない時間帯というのも残念。

「週刊こどもニュース」は教えるのは父(男)、教わるのは母と子ども(女こども)という固定した構成のしかたに問題がある。

「ドラゴンボールZ」のドラゴンは話の中ではめったに現れないが、CMにでてくる。

*グループ4

子どもにとっては本編とCMの区別がない。ことばの意味を理解できているのだろうか。音として耳に入っているのではないか。

*グループ5

「ドラゴンボール」では「男は力強いこと」が

強調されている。一方「セーラーMoon」では「女はセックスアピール」が強調されている。

場面展開が速いのはストーリーをごまかすためもあるのではないか？あまりに目まぐるしいので集中力がなくなる。

NHKの番組でことばの乱れを感じる。全体に夢を作る内容の子ども番組がない。もっと新しいイメージで番組を作ってほしいと思う。

*まとめ

テレビの、特に子どもへの影響は、その場だけのことでなく長い間の累積効果で考える必要がある。女の子向け、男の子向けなどと男女の役割や価値観を子どものころから押しつけてしまうような番組がいかにも多めに改めて気付く。

「いろいろ問題があるからテレビは見ない」と「避けること」では真の解決にはならない。テレビの社会的な影響力は個人の問題としては決して解決できない。テレビを視聴したうえで問題を提起していかなくてはならない。毅然とした態度で次世代へのテレビを作るのが、大人の責任でもある。

* * *

尚、今回のフォーラムは共同テレビジョンの取材を受けた。フジテレビで毎週土曜日の早朝5:15~5:45放映の「フジテレビ批評」にとりあげられ、FCTスタッフ3名がスタジオ出演して「テレビと子ども世界会議」の報告とともに、8月5日に放映された。(まとめ・佐々木はるひ)

FCTテレビ分析調査報告書No.12

テレビと阪神大震災 ——メディアリテラシーのアプローチによる——

番組の構成と内容/震災報道に登場した人びと/技法を読み解く/「今日一日のドキュメント」/メディア・リテラシーへの展開/資料編

販売価格1,800円 送料240円 申し込みはFAXで佐々木まで 03-3333-0892

FCT 18周年記念フォーラム

- ・日時：1995年11月25日(土) 1時30分~4時30分
- ・場所：東京都ウィメンズ・プラザ JR山の手線渋谷駅下車7分 地下鉄銀座線表参道下車5分
- ・「'95年のテレビを検証する」——市民の発言をどう可能にするか——

NGOのすばらしいパワー

——北京世界女性会議に参加して——

中野恵美子

北京に到着すると「ホテルのロビーでの会議は当局が禁止しています。トラブルにならないように会議は各自の部屋で行ってください」と言われて驚いてしまった。しかし翌日NGOフォーラムの会場に入ると一帯ではいくつもの集会やデモ行進が活発に行われさほどの不便を感じることはなかった。もっとも、会場の入り口には直立不動の姿勢で兵士が立ち、手荷物の「安全検査」は入念に行われていたが、それでも私は3万人もの外国人が一度にこの大きな国に入国し、しかもそのほとんどが平和を願う女性たちであることの痛快さに、心が沸き立つような思いで1週間の滞在期間を過ごした。

・会場をうめるたくさんの展示物

会場にはあふれるほどのポスターがはられ、たくさんのチラシが配られていた。室内やテントではさまざまな展示や催しが行われており時間がいくらあっても足りない。最初に足を踏み入れたのはノルウェーなど北欧諸国の部屋だった。女性の地位の向上にむけての取り組みの様子と現状が展示場いっぱいに表示され「女性にとっての先進国」の余裕が感じられる。これらの国の高齢の女性たちのグループが自分たち自身が楽しみながらダンスや歌などのパフォーマンスをしている。

これと対照的に感じられたのは、アジアの国々の「少女売春」などの実態を訴えるポスターや展示物だった。「少女は明日の女性」「子どもは性差別の犠牲者」といった内容のポスターが目につく。あるインドの女性はこれから展示するというポスターを大事そうに抱えていた。雨がふりだしてきたので私はこのポスターを運ぶのを手伝うことになったが、その間彼女は女性の地位の低さは次の世代に大きな悲劇をもたらしている、日本企業などによるセックスツアーへの批判、先進国からの「開発援助」による女性の生活の破壊などのことを熱意をこめて話してくれた。

・素敵女性たちとの出会い

こうした問題の解決を求めて、世界各地の女性たちが一緒に討議している、その輪の中にいることはそれだけで大きな力を与えてくれるものだった。少女の問題を討議するワークショップで身体の不自由なアフリカの女性は貧困から脱するための教育の重要さを、教育を受けることのなかった自分の母親の話から切々と語っていた。鮮やかな民族衣装をまとったアフリカの女性たちは会場のあちこちでよく目にした。

「平和のテント」では「グランドマザーズ・フォー・ピース」というグループで反核の平和運動をしている素敵アメリカの女性に出会うことができた。「おばあちゃんたちの平和運動」という穏やかそうな名を掲げてこのグループは米軍が核実験をするたびにデモ行進をし、代表の女性は何度も逮捕されているという。カルフォルニアに住むという別の女性は、私の超ブロークンな英会話に辛抱強くつきあいながらカルフォルニアには移民としてやってくる人が多いのでスペイン語の勉強を始めた、ベトナムの人が多くなっているのでもしベトナム語も理解したいと言う。会場では8割以上のセッションが英語で行われていたが、彼女は英語を使う人が世界に多すぎるのは決していいことではないと考えている。

これらの人たちはいずれも60歳をはるかに越えて、現役のNGOの活動家としてこの会議に参加している。私も2、30年後に彼女たちのように気持ちよく生きていたいものと思った。

・もりだくさんのワークショップ

10日間の会期中に開かれたワークショップは5千以上と伝えられている。ワークショップはテーマごとに経済、政治、人権、平和・安全、教育、健康、環境、精神・宗教、科学技術、メディア、芸術・文化、人種・民族、若い世代の13項目に分類されていた。主催団体の項を会議のプログラ

ムから拾ってみると新潟、福井、埼玉、沖縄、広島、神奈川、横浜、東京などたくさんの日本の地名を見つけることができる。プログラムには団体名しか記されていないので日本の女性たちがいくつかのワークショップを開いたかを正確に知ることは現在のところ不可能だが、おそらく会議全体では100以上になるのではないだろうか。

会期中、予定された会場に行っても主催者が来ずにワークショップが流れたなどの情報が流れていた。会場がホテルから遠かったことによるトラブルや、旅の疲れで体調を崩し心ならずも会場までたどりつけなかった人もいたと聞く。私自身もそのような場面に遭遇したが、しばらくすると誰からとなく声をかけ、そこに集まった人たちによるワークショップがその場で始まる展開となったことは逆に素晴らしい体験であった。

ワークショップに共通する課題は「未来の問題」である。「これからは北と南の、また女と男のパートナーシップが必要」ということばをいくつかの場で耳にした。「北京後」の行動をどう展開していくか、いかにしてグローバルなネットワークをつくっていくか、5000人を越えた日本からの参加者のひとりとして私もこのことをこれから考えていきたいと思う。

・活発だった「メディアと女性」の論議

女性をめぐるさまざまな課題における「メディアの役割」に大きな関心が寄せられたのがこの会議の特徴のひとつだったといえるだろう。

5ヶ国語同時通訳システムのあるメイン会場で行われた「メディア、文化、コミュニケーションその挑戦と機会」と題するパネルディスカッションは、通路まで超満員の人気だった。NGOグループが主催したメディアに関するワークショップは全部で100以上あり、毎日必ず会場のどこかで女性とメディアに関する討議があった。

ワークショップの表題から私なりに内容別に分類してみると、①メディアに働く女性の問題など「メディアと女性」の関わりに関するもの、②メディアの中のジェンダー・ステレオタイプと性差別など「メディアが描く女性像」に関するもの、

③平和のためのメディアと女性の役割など平和や政治に関するもの、④社会の発展と女性のエンパワメントや、「開発」に関するもの、⑤メディアと女性のネットワーキングに関するものなどであった。

ワークショップを主催したのはテレビやラジオに働く女性やジャーナリストのグループ、各地の草の根の市民グループ、市民団体、国際的な市民団体、大学の研究グループなど。それらの人びとの国、地域はエジプト、ザイール、カタロニア、イラン、アラブ、バングラデシュ、マラウイ、アメリカ、オーストラリア、ロシア、フィリピン、日本など実にさまざまだった。この社会でメディアが果たす役割の大きさは途上国、先進国共通のテーマであることを改めて実感させられるものだった。

・「GCN」のワークショップ

日本のメディア研究で活躍している女性研究者たちで作っている「ジェンダーとコミュニケーション・ネットワーク」(GCN-JAPAN)は「商業化するフェミニズム：日本のメディアの中のジェンダーとセクシャリティを読む」と題するワークショップを主催した。GCNのメンバーのほとんどはFCT会員でもある。

当日はさすが足りなくなるほどの盛況で、とうとう床に座り込む人も。(もっともこうした光景はこの会議では決して珍しいことではなかったが)

①日本のメディアに働く女性について世界的な調査でも女性の参画率は最低のランクであったこと、②テレビCMの固定された性役割、③女性雑誌の大量の広告によってもたらされる「美の基準」、④テレビアニメの「少女戦士」ものの持つ精神性、などについての報告がそれぞれVTRを使って行われた。

最後にこれらの報告と討議を受けて、FCT代表の鈴木みどりのコーディネートで「日本のメディアと政府に向けた提言」が提案され、ワークショップ参加者の賛同を得てその場で100人以上の署名が集まった。この提言は帰国後、総理府と主なメディアに送付された。提言全文は次頁。

(資料)

日本のメディアと政府へ向けた提言

Recommendations Directed at the Media and the Government Of Japan

私たちは北京における第4回国連世界女性会議NGOフォーラムにおいてワークショップ「商業化するフェミニズム：メディアのなかのジェンダーとセクシュアリティを読む」をもち、アジア各国を初めとする世界のさまざまな国の女性たちと共に「女性とメディア」に関する日本の現状について検証する時をもった。

このワークショップでの検証に基づいて、私たちは両性の平等を推進する上でメディアが果たすべき役割と責任の重要性を再認識し、日本の放送・新聞・出版・広告などのメディア企業・組織・業界団体および政府に対して以下の提言をまとめた。

日本のメディアと政府にいま求められているのは、情報の南北格差が拡大する一方の今日の世界にあって、少数の「メディア大国」(media-rich countries)の一つとして日本が世界の人々に対して負っている責任の重さを自覚することであり、また、平等な社会の実現へ向けたグローバルな取り組みにおいても、情報・メディアの領域で積極的な役割を果たすことである。

そのためにも、まず日本国内におけるメディア変革の必要性を認識し、各々のメディア企業・組織および各業界、また政府が、私たち市民とともに誠意をもって変革に取り組んでいくことを期待する。

提言1 「女性とメディア」に関する特別委員会を、市民・メディア・政府三者の協力によって早急に設置し、事態の改善に取り組むこと。

特別委員会の組織・委員選出・運営のすべてにわたって市民の参加が不可欠である。そのような委員会はすでに世界の国々や地域で設置され、多大の成果を上げている。なかでも1986年設置のEC「放送における平等な機会委員会」(the Steering Committee for Equal Opportunities in Broadcasting, the European Community)、1979年にカナダ放送行政委員会内に設置された「放送における性役割固定に関する特別委員会」(the Task Force on Sex-Role Stereotyping in the Broadcasting Media, CRTC)、オーストラリア政府による1989年設置の「広告を含むすべてのメディアの女性像に関する特別委員会」(the National Working Party on the Portrayal of Women)などが参考になる。

提言2 各メディア企業・組織において両性の平等な雇用および配置を実現すること。また両性の平等の推進に関して、管理職を含むすべての雇用者の意識変革を促進するための研修プログラムを、市民と協力して実施すること。

提言3 日本のメディアはその内容の制作・編集にあたって、世界の多様な民族・文化を尊重し、それらの国々や地域の人々およびメディアとともに「平等・人間性の開発・平和」の実現に積極的に取り組んでいくこと。

1995年9月6日 北京にて

ジェンダー&コミュニケーション・ネットワーク・ジャパン (GCN-JAPAN)

コアメンバー：加藤春恵子(代表)、井上輝子、小玉美意子、鈴木みどり、村松泰子

■特集4

「ニュースのなかの女性参加

—グローバル・メディア・モニタリング・プロジェクト—

まとめの報告書(Final Report)より

宮崎 寿子

世界各国の新聞、ラジオ、テレビニュースにおいて、どの程度女性参加が進んでいるかを検証するために行われた調査、「グローバル・メディア・モニタリング・プロジェクト」の報告書が北京の第四回世界女性会議で発表された。この調査はガゼットの55号でも紹介した通り、カナダの市民グループ、メディア・ウォッチがイニシアティブをとり、1月18日の新聞、テレビ、ラジオニュースを対象に、ニュースにおける女性参加について世界71カ国で一斉に調査したものである。

日本ではFCTが中心となり、メディア・ウォッチから送られてきた各国共通のコーディング・シートを使って、新聞、テレビ、ラジオニュースを分析し、そのデータをカナダに送った。コーディングの際には、大阪の「国際婦人年大阪連合会」の方々や、和光大学井上輝子教授の人間関係学科の学生の方々の協力も得た。

このように、世界各国で草の根の活動をするグループがボランティアに収集したデータを統合し、その分析結果をまとめたのがこの報告書である。1月18日は偶然にも阪神大震災の翌日という特殊な日になってしまったが、ある特定の日に一斉にニュースを録画、録音し、それを手分けしてコーディングするという作業をボランティア活動として行うグループが世界各国に存在し、その結果として、71カ国の18日の新聞、テレビ、ラジオニュースに関する4万9千におよぶデータが集められたことは、非常に画期的なことである。今後のメディア問題は、世界的視野に立つ必要があることを考えると、このプロジェクトが実際に行われたこと自体が、非常に重要な意味を持つといえよう。

さて、報告書の内容であるが、まず最初に断っておきたいのは、分析結果が「世界の情勢を把握する」という観点から、71カ国を一まとめにした傾向、もしくはアジア、南アジア、アフリカ、

中近東、東欧、西欧、北アメリカ、中央アメリカ、南アメリカ、南太平洋の10地域における傾向を中心に論じられており、日本のデータ及び各国のデータについては、個々には論じられていないということである。大きなプロジェクトだけに各国の個別データは掲載できなかったのであろう。しかし、日本のデータが、アジアとして統合された10カ国のデータの中に埋もれてしまっており、日本がアジアの中で、また世界の中で、どのような位置を占めるのだろうかという疑問に答えてくれないのは残念である。これについては現在、FCTからメディア・ウォッチに対し、日本を含めた各国データを送付するよう要請している。しかし、メディアウォッチ自体も予算の関係上、これ以上の分析は難しいのではないかということから、北京では、ANWIC(アジア女性コミュニケーションネットワーク)の研究プロジェクトとして、より詳細な分析を行っていったらどうかという提案もあったようである。

紙面の制約もあるので、次に報告書の中の主な結果の一部を取り上げて解説する。

ニュースの中の女性：ジャーナリストとインタビューされる人々

3つのメディアを統合して、世界の平均を見ると、ニュースに現れるジャーナリストの数は、女性が43%を占めるのに対し、インタビューされる人々では17%を占めるにすぎないという結果が出ている。

ジャーナリストに関しては地域差が大きく、南アジアではジャーナリストの68%を女性が占めているのに対し、中央アメリカでは29%にすぎない。(表1参照)この南アジアの68%という数値は、インドの71%という数値が平均をかなり引き上げており、世界でも50%をはるかに越

える数字を示したのはインドだけであった。これはインドでは、地方テレビニュースおよび地方ラジオニュースにおいて、女性ジャーナリスト（アナウンサーを含む）が多用されていることに起因している。

このように、ジャーナリストでは女性優位を示すインドだが、インタビューされる人々に関しては、全く逆で、世界でも最低の10%という低さを示している。このような極端な数値を示すインドのデータを除いた場合、世界の平均は、ジャーナリストの場合、女性比率が36%、インタビューされる人々の場合は19%になる。

新聞、ラジオ、テレビの三つのメディアを比較すると、新聞における女性ジャーナリストがもっとも少なく、ラジオやテレビの半数近くになっている。インタビューされる人々に関しては、どのメディアも低い率を示しているが、その中ではテレビの21%が比較的高い方である。

取扱い分野による女性、男性の比率

政治、政府関係の分野では、女性ジャーナリストが44%、男性56%であるが、インタビューされる人々では女性7%に対し、実に男性が93%を占めている。これは政治、政府関係の要職に携わる人の男女比率を反映したものであろう。

インタビューされる人々のジェンダーと年齢

ラジオの場合、年齢はわからないので、新聞とテレビのデータが取り上げられているが、新聞とテレビは両方とも同じような傾向を示している。インタビューされる人々は、35才までは男女ともほぼ同数であるが、35才〜49才では男性は女性の3倍になり、50才〜64才になると実に男性は女性の1.4倍になっている。

この結果は職業的地位と深く関連している。職業を、“社会的に影響力の高い職業”＝（政治家、政府関係者、警官／軍人、裁判官、宗教の指導者、専門職：管理職／医者／弁護士など）と“社会的

に影響力の低い職業”＝（事務員／店員、商人、芸人、タレント、スポーツ選手、家事労働者、学生、退職者、失業者、無職）にわけると、インタビューされる人々の55%が影響力の高い職業についており、そのほとんどが35才以上の男性であった。影響力の高い職業を持つ人々では、女性はどの年代においても、インタビューされることは少ないのに対し、男性は35才〜49才では5倍以上、50才〜64才では20倍以上にもなっている。これを影響力の低い職業の人々のあいだで見ると、各年齢層を通して男女による差はほとんど見られない。

以上、メディア・ウォッチの報告書からその結果の一部を紹介した。この報告書を読んで、一つの大きな世界的傾向として言えることは、グローバル化されたと言われる世界のニュースではあるが、それが描く社会（インタビューされる人々に象徴される社会）は、依然として、男女がほぼ同じ数で存在する「わたしたちの社会」を映し出したものではなく、「権力／地位のある強者たちの社会」を映し出したものであるということであろう。

表1 ジャーナリストとインタビューされる人(%)

地域	ジャーナリスト		インタビューされる人	
	女性	男性	女性	男性
アジア	36%	64%	14%	86%
南アジア	68	32	13	87
アフリカ	33	68	22	78
中近東	43	57	14	86
東欧	37	63	15	85
西欧	37	63	16	84
北アメリカ	38	62	27	72
中央アメリカ	29	71	21	79
南アメリカ	31	69	15	85
南太平洋	45	55	20	80
平均	43%	57%	17%	83%

“囁き”・“ズバリ”番組続出への戸惑い

江波戸哲夫・作家

オウム真理教の強制捜査が始まった3月下旬から2カ月ほど、私はすっかりオウム報道にはまっていた。

個人でソフト屋をやっている友人で「2カ月間、ぼくもついテレビを見てしまって仕事にならなかったから、顧客の催促電話が恐くて留守電にしっ放しだったよ」という大馬鹿者もいます。しばしば彼から来る「事件の謎解き」の長いFAXに返事を書かざるをえず、それにもかなり時間を取られました。何しろ彼の謎解きには「警官にはタカ派とハト派の暗闘があり、ハト派の国松長官はタカ派にやられたのだ」というようなものまであるのですから、返事には時間がかかりました。

単行本もエンタテイメントはかなり売れ行きが落ちたようで、私にも被害が及びましたが、みんなオウム報道が面白くて、本を読むどころではなかったのですから仕方がない。

あれはテレビを見ていたというより、おどろおどろしい日本の腐った胎内への覗き窓に、わが身を丸ごと突っ込んでいたような気がします。あの時は恥ずかしながら、報道の姿勢を問えるような冷静な態度はほとんど持っていませんでした。

*

腐った胎内といえ、オウム報道ばかりでなく最近の視聴者参加番組には、人間の「恥部」を剥き出しにするような番組が多くなりましたね。

「上岡龍太郎のズバリ」だとか「クイズ悪魔の囁き」だとか「喧嘩の花道」だとかがそれです。

最初は「ズバリ」で驚いた。遠距離恋愛というテーマで、20組ほどの20歳前後のカップルが登場したのですが、1人の女の子があげすけな性のこと、もっとはっきりいましょう、男の持続時間を口にしたのです。かなり情けない記録が電波に乗ったのですから、私は男の身になり（こりゃ、たまらんだろう）

と思いました。しかし男は平気でにやにやしてい

ます。

「お前、けっこう満足してたじゃないか」などと反論さえしていました。さらに女の側からの反論が続き、場面はますます醜悪なことになっておったのです。

昭和21年生まれの私は、そういうことは仲間内の酒席でいっても、拷問されたってテレビカメラの前ではいわないもの、と思ってきました。それを冗談みたいに電波に乗せる若いカップル。

「こいつら一体、何なんだ？」と度肝を抜かれましたが、その後「囁き」でも「花道」でも、似たような若者が次々と登場しています。つまりそういう若者が一つの層となっていることは間違いないようです。ひと苦勞すればここから何か若者論ができるでしょう。

それはさておき、視聴者の立場から考えたとき、私は仕事場で一人で見るからいいが、家庭で子どもと一緒に絶対に見たくないと思います。家庭で中二の末っ子が見ていたらきつと止めさせます。

大学三年の長女と一緒にならどうするだろう？私の方が恥ずかしさのあまりテレビのまえから逃げ出すかも知れない。

そんな番組が続出する状況をどう考えたらいいのか、どう対応したらよいかと戸惑います。

公共性の高いテレビということのを考慮に入れば、人間観察としてはなかなか面白い。

じゃもっと限定されたメディアでやればいざらうということになるが、それでは自分の職場の同僚が見ているかもしれないテレビでこんなこという奴らがふえているということは分からない。

テレビのことを、市民運動の立場から論理的に考えるということは少なくなりましたが、一人の視聴者としてあれこれ悩むネタは尽きません。

（筆者は元学陽書房勤務。FCT編の「テレビと子ども」担当編集者、以後ずっと会員）。

FCT データバンク

— 国内篇 —

●マスコミvsオウム真理教、小林忠、三一書房、1995年8月刊。

元新聞記者である著者が、一連のオウム報道を徹底的に検証し、メディアの功罪を鋭く指摘している。オウム関連の各事件をメディアがどう伝えたか、きめ細かな取材がなされており、巨大メディアに操られる情報化社会の盲点が浮き彫りにされている。

①オウム報道への視点②オウム信者の人権は守られたか③ザ・情報戦争④一億オウム・ウォッチャー⑤権力vs報道⑥Xデー報道の6部構成。単なる犯罪報道のあり方だけにとどまらず、「権力」「人権」という視点で各メディアの問題点を指摘しているのも、本書の大きな特長。

漠然としたオウム報道批判が飛び交う中で、何が問題だったのか、豊富な資料と創造的な分析を基にわかりやすくまとめられている。(I)

●犯罪・事件と取材・報道の課題—“オウム事件”の投げかけたもの、「新聞研究」、No.529、1995年8月号。

マスコミ各社(読売、朝日、毎日産経、共同通信、NHK)のオウム担当デスク、警視庁キャップらが、警察庁・篠原弘志刑事局刑事企画課長の基調講演「捜査と報道」をもとにパネル・ディスカッション形式でオウム報道を振り返る。

基調講演で同氏は、一連のオウム報道に対し、次のような感想を述べている。①センセーショナルな報道に走り、人権面では後戻りしてしまった②警察マターのことを「政治マター」と混同して書くことの危険性を感じた③「社会を守る」という報道の使命を忘れていなかったか④先走

った報道が国際的に与える影響をマスコミは考えていたか⑤警察の捜査に対しワンパターンの批判批評が目立つ⑥報道とりわけテレビが頻繁に放送した生資料は果たして意味があったか⑦マスコミの取材と警察の報道対応が噛み合わなくなっている⑧一過性の事件として歴史に葬ることなく、オウムが社会のいかなる病理から出てきたか、是非解明してほしい(マスコミへの期待)。

以上の指摘をたたき台に取材サイトの生々しい証言が続く。パネリストたちは、今回のオウム報道を「危うい報道」「報道の先祖返り」と振り返る。オウム報道の第一線にいた彼らだからこそ知り得る舞台裏の情報には、オウム報道の問題点を説くヒントが随所に散りばめられている。また、報道する側のジレンマや反省だけでなく、オウムのメディア戦略や前打ち報道の可否についても言及し、社会を守るためにメディアはどうあるべきか考えている。(F)

●麻原逮捕で航空共同取材—例外措置ながら自由判断に意義、後藤秀雄「新聞研究」、No.529、1995年8月号。

麻原彰晃オウム真理教代表が逮捕された5月16日、在京の新聞・通信7社は、同代表が逮捕された山梨県上九一色村上空から東京までの護送ルートのヘリコプター取材をプール取材で行った(尚、同時性・即時性を重視するテレビ・メディアはこれに不参加)。この例外的な緊急措置は、地域住民の苦情や安全確保を考慮し、報道界が自主的に決めたもの。本論では、その経緯を振り返り、今回の自主規制に対する業界内のさまざまな意見をとりあげている。

麻原護送プール取材の立て役者、新聞協会編集委員会「航空取材問題に関する小委員会」の鈴木章郎委員長は、「一方に知る権利への奉仕があり、他方に安全確保と騒音の問題がある。共同取材を行わざるを得な

い場合もあるが、その要否は、写真部など取材部門の考えに基づき、場所や対象に応じて、あくまでもわれわれ報道サイドで自主的に判断すべきことだ」と今後の対応をまとめている。(U)

●洗脳ゲーム~サブリミナル・マーケティング、横井真路、リポポート、1995年3月刊。

かつて電通ロサンゼルス社に勤務し、現在はメディア・コンサルタントとして本格的なサブリミナル研究を続けている著者が、アメリカにおけるサブリミナル戦略の現状を克明にレポートしている。

サブリミナルに関する書としては、同じ出版社から出ているウィルソン・ブライアン・キ氏の「メディア・セックス」「メディア・レイプ」が有名だが、著者は、「サブリミナル=洗脳」という視点を手がかりに、メディア・音楽・宗教・商業・医学など多方面におけるサブリミナル戦略のからくりを解き明かしている。

サブリミナル・テクニックはきわめて高度化され、より効果的に、より隠匿性の高いものになってきている(著者)。しかし、「洗脳ゲーム」というタイトルの裏には、「サブリミナルという“技法”以上に、“洗脳”という戦略こそ恐ろしい」という著者のメッセージが隠されている。(F)

●テレビ・アニメのオウム・メッセージ、竹内希衣子、「マスコミ市民」No.320、1995年7月号。

1989年12月24日夜、日本テレビ系の全国ネットで放映された人気アニメ『シティハンター3』に、オウム真理教の麻原代表をはじめとする4種11カットが「隠し絵」として挿入されていた。これに対し、TBSは5月2日、夕方と夜のニュースで大特集を組んだ。

一本のテレビ・アニメから生まれたこのサブリミナル論争の顛末を、「アニメ」「オウム」という切り口

で検証し、守りに徹したテレビ界に苦言を呈している。

サブリミナルの免疫を持たない日本のメディアがいかにひ弱か、本文に多数引用されている関係者の発言を見れば理解できる。日本のサブリミナル論争は、視聴者のためにあるのではなく、メディアのためにあるとも言えるのだろう。(I)

●サブリミナル使用とメディアの責任、渡辺武達、「マスコミ市民」No322, 1995年9月号。

TBS『報道特集』(5月7,14日放送)のサブリミナル使用問題は、この7月に形式的な決着がついた。しかし筆者は、以下の3点を理由に「問題は本質的になにも解決されていない」と強調する。①サブリミナルの発覚はメディア(読売vsTBS)の企業間戦争の結果にすぎない。サブリミナル手法使用の善し悪しの議論など、本論から遠い。②他メディアによる指摘によって発覚し、当事者が謝罪するというパターンで問題の先送りがされただけ(ムスタンのやらせ事件、椿発言のケースと酷似)。③メディアが問題を起こし、郵政省に謝罪し決着するやり方はメディアの国家管理を強化し、メディアの市民主義による運営への展望を困難にする。

また、今回のサブリミナル論争において本来議論されるべき問題解決のための前提条件として、筆者は以下の5点をあげている。①メディアは視聴者が意識上、知覚できない情報を送ってよいのか②サブリミナルに訴える情報送出に効果はあるのか③閾の境界線は人によって違うのではないのか④視聴者がサブリミナル手法で送られてくる情報を事前に知っている場合はどうか⑤サブリミナルが許される場合があるとすればそれはどんな時か。

サブリミナル使用におけるメディアの責任を問いたただけでなく、市民主義の立場から常にメディアを

監視することが大切であると結んでいる。(U)

●テレビ・ニュース比較研究の試み(その2)～“自衛隊合憲”答弁を中心に～、横山滋、「放送研究と調査」、1995年8月号。

村山首相の“自衛隊合憲”答弁など含む、衆議院本会議での代表質問関連のニュース番組比較・分析を通じて、テレビ・ニュースのあり方を考えている。分析対象は、平成6年7月20日夜の7つのニュース番組。本論では、そのうち、国会での代表質問に関連する部分のみを比較・分析している。

比較のしかたは、①「NHKニュース間の比較」②「民放各局のニュース番組との比較」に大別される。

各番組の構成、演出の仕方をはじめ、各キャスターの表現を丁寧に分析しており、各番組の特徴と問題点が明確に指摘されている。

この比較分析結果をふまえて、筆者は3つの問題点を提起している。

①ニュースの記憶の残り方、時間のコスト・パフォーマンスなどの視点から「優れたテレビ・ニュース」とは何か、テレビの持つメディア特性を考慮しながら考える②放送で主観を述べる場合には、その必然性、もしくは、それが許容されるべき理由が問われるのでは?ニュースを伝達するためには、十分な客観性が求められる③ニュースが伝える情報の違い(認知情報or評価情報)がどのように受け止められ、その姿勢の違いがどのような効果を生むのか?(F)

●メディアの中の性別役割分業1、2、村松泰子、「放送レポート」No134・135, 1995年5、7月号。

「ジェンダーの視点からみたメディア組織」シリーズの2、3回目。放送局・新聞社内の数少ない女性がどのような部門に配置され、どのような職種に従事しているか、その実態を各組織の部門別、職種別に詳しく調

べている。

分析対象は、放送局がNHK、民放キー局3局、地方局107局合わせて111社。新聞社は、全国紙6社(通信社1社を含む)、地方紙65社(スポーツ紙、専門紙含む)合わせて71社。

性別役割分業の実態が浮き彫りにされた調査結果を受け、筆者はこう主張する。「社会や時代の現実に迫ろうとするメディアならば、社会は女性と男性とで構成しているという当然の認識をもち、メディアの運営も男女で担い、できる限り多様な現実、見方を提供するべきだ。」

女性比率に焦点をしばった統計資料(計10種類)は、各メディアの特徴を把握、比較・検討するのに役立つ。(I)

●世界のメディアへの女性参画、村松泰子、「放送レポート」No.136, 1995年9月号。

国連とユネスコが中心になって行った、世界30ヶ国の放送局・新聞社に働く女性の実態調査をもとに、日本と諸外国の状況を比較している。各国のメディアへの女性参画の現状とその特徴が要領よくまとめられてあり、日本の改善すべき点も具体的に指摘している。著者は最後にこう警告している。「思いきった手を打たなければ、21世紀になっても日本のメディアは世界でも異常な状態であり続けることになる。」(F)

●<月刊マスコミ市民>

media scope欄は「メディアと女性の人権」を中心的テーマに、会員の女性たちがシリーズで執筆している。マスコミ情報センター、1995年。

●子ども番組は今、中野恵美子、6月、No.319

●地震報道からみたテレビ報道～多様性はばむ視聴率競争、宮崎寿子、8月、No.321

●オウムの女たち、大塚英志、「諸君」1995年9月号、文芸春秋社。

信徒の4割が女性といわれているオウム真理教なのに、オウムをめぐる論議や報道では男性幹部のみが信徒の代表的存在としてみなされている。女性の幹部をふくむ信徒たちへの言及は容顔など人権侵害的な興味で報道されている、オウムはまさにフェミニズムの問題であるにも関わらず女性たちが黙して語らないのは何故か、と問いかけている。オウムの女性たちの前歴から浮かび上がるのは編集者、ライターといったメディア関連のいわゆるカタカナ職業の多いことで、かつてはその職業につくことが自己実現に直結するかのようになられていた職業だった。より満足のいく仕事を求めて転職を繰り返す、結局は消費社会から、フェミニズムからおちこぼれて宗教にたどりつく。女性幹部の石井久子の自伝から「私たちがテレビや雑誌などから取り入れている様々な情報によって自己実現する限り、自己の無常は理解できない」と紹介し、日本のフェミニズムはあまりにも足早に時代を駆け抜け、アカデミズムや政治の領域で相応に社会化されもしたが、一方で放置されたまま未解決の問題が多く残り、オウムの女性たちをうみだしたのではないかと「メディアと女性」の切り口から提起している。(T)

●ニューズペーパーウーマン—大統領番から戦争特派員まで、栗木千恵子、中央公論社、1995年7月刊!

「シカゴ・トリビューン」東京支局記者だった著者がアメリカの各分野で活躍している女性記者にインタビューをして、いかにして地位と実績を手にしたか、その努力のあとをたどっている。

シカゴ市係官の慣行化していた組織的不正を暴いてアメリカジャーナ

リズム史に残る調査報道を、「賄賂を渡しながら」取材したといわれるパメラ・ゼクマンはその後CBSテレビに転身している。CBSシカゴの調査報道チームを率いる彼女は小柄でおしゃれな、ハイヒールをはいた女性で、インタビューを通して、アメリカの調査報道のありようが具体的に理解できる、綿密な取材ぶりである。

以下おなじような手法で、全米一の犯罪報道記者エドナ・ブキャナン、大統領の最古参事サラ・マクレンドン、リングサイドからのホワイトハウス報道ヘレン・トマス、女性特派員たちの戦争報道グロリア・エマソンほか他。様々なコラムニストたちも紹介されている。女性ジャーナリストを通してアメリカのジャーナリズムを語りたかった、という著者の熱意が迫力になっている。(K)

●ドキュメント「放送」が最も輝いた日、石井清司、「中央公論」1995年8月号 中央公論社。

戦後50年の節目に、敗戦直後の放送番組と放送局、そのシステムのありようをドキュメントでまとめようと試みたもの。1995年9月GHQ(連合国占領軍司令部)はマッカーサーを司令官とする占領政策を実施して放送及び新聞への介入を開始する。放送協会にこういう番組を作れといった指示が出るなど、アメリカ流に変えようとするGHQと協会の間には緊張関係が続いた。その後行政から独立した電波監理委員会の設置をたった二年半でつぶした吉田茂とGHQの確執、1951年9月の初めての民間放送の放送開始にいたる経緯、など、「50年前アメリカと日本という国の違いに関わらず、その時代を共有しようとした人々が必死

で守り獲得しようとしたものが何であつたか」をミニ放送戦後史としてドキュメントしている。(T)

●テレビキャスター、江波戸哲夫、潮出版社、1995年6月刊!

月刊「潮」に連載されたフィクションの改題、加筆によるもの。太平洋テレビが新しく発足させるニュース番組「ニュースチェイサー」のキャスターの人選からはじまって番組づくりがいかにして進行していくか、その経緯をたどりつつ、テレビという業界とそれを取りまく人間たちのドラマを描く、という手法でテレビの内幕が語られている。視聴率をとるためにやらせのテロ事件を仕組むことになったことから、テレビ局の社長をはじめとする人々の対応、事後処理、などいずれも現実でありそうなディテールで書き込まれて、いわゆる業界小説としての情報も盛りだくさんで、「情報戦争時代」のテレビの内幕の一端を理解できる。(K)

●戦後50年馬鹿、ビートたけし、「新潮45」1995年10月号、中央公論社。

「戦後50年を一番熱心に記念したのはテレビ局だったって気がする。おいらも何本か出たけど、戦後50年企画の多かったこと。だけどただ50年間に起こった出来事をならべてみせるだけ。歴史年表読んでるって感じ。そして決まって「その時たけしさんは何をしましたか」って聞かれる。戦後どのように今の人たちの精神状態が形成されてきたかっていうような、一番熱心なことは話題にならない。戦後50年について何を考えるべきかってことが、根本的にわかっていないんじゃないか。」(S)

FCT市民のテレビの会はテレビの作り手、視聴者、研究者が立場を超えて集い、より良いテレビの実現をめざして実証的研究と実践活動を積み重ねていくためのひろば＝フォーラムとして1977年10月に創設されました。その運営は創設以来、事務局スタッフ及び会員のボランティア、全国の会員からの会費とカンパ、定期のFCTフォーラム(公開の研究会)参加費、および調査研究報告書や季刊情報誌「fct GAZETTE(ガゼット)」等のオリジナル出版物配布からの収入によって行われています。「ガゼット」の年間購読のお申し込み、バックナンバーのお問い合わせ、FCT出版物や入会などについてのお問い合わせは事務局へハガキまたは電話(03・3721・8694)でどうぞ。